

# 『源氏物語』「賢木」巻の制作に関する試論

呉 羽 長

(一九八九年一〇月一日受理)

## A Study of Creative Process of "Sakaki" in *Genji Monogatari*

Susumu KUREHA

### 一

「賢木」巻は、六条御息所との愛の関りを収束させた源氏の桐壺院崩御に起因する政治的逆境にある姿を描く巻である。彼はその逆境下、臘月夜との逢瀬の発覚により須磨への謫居へと導かれる。この巻は以下のような挿話によって構成されている。

(源氏二十三歳)

- ① 六条御息所の伊勢下向の決意 (――)
- ② 野の宮の別れ (秋九月七日ばかり)
- ③ 御息所と齋宮の伊勢下向 (秋九月十六日)
- ④ 桐壺院の重病と崩御 (冬十月―十二月二十日)
- (二十四歳)
- ⑤ 年明けの源氏をめぐる情勢(臘月夜・左大臣・紫上・朝顔齋院など) (春一月)
- ⑥ 源氏の臘月夜との弘徽殿での密会 (――)

⑦ 三条院の藤壺への侵入及び藤壺の出家の思い立ち (――)

⑧ 源氏の雲林院詣と二条院帰邸 (秋)

⑨ 源氏の朱雀帝拝謁・藤壺との対面 (秋)

⑩ 臘月夜からの消息と源氏の返信 (初冬)

⑪ 桐壺院一周忌及び藤壺の法華八講主催と出家(冬十一月一日頃―十二月十日頃)

(二十五歳)

⑫ 年明けの源氏の藤壺への年賀と左大臣方の凋落(春一月)

⑬ 夏の雨の日の韻塞ぎと三位中将主催の負け業(初夏)

⑭ 臘月夜との密会とその発覚 (初夏)

右の①―⑭の挿話の中で、巻冒頭の①②③には六条御息所の伊勢下向の決意に伴う源氏との別れが述べられるが、この御息所との別れの記述を巻の始めに置いて、以降の叙述は、二十三歳暮から二十四歳正月にかけての桐壺院の崩御及びその影響による源氏の政治的凋落の予感を描く記事(④⑤)と、二十四歳暮から二十五歳正月にかけての桐壺院の一周忌と藤壺出家、更に源

氏・左大臣側の政治的凋落を描く記事(⑪⑫)という、二つの源氏の政治的な状況を確認する枠組みを据え、この間に⑥朧月夜との密会、⑦藤壺への侵入、⑧雲林院詣でと帰京のありようを述べる記事を置いて、更に⑫二十五歳正月の記述のあと、⑬夏の雨の日の韻塞ぎ及び⑭朧月夜との忍び逢いとその露頭という挿話を添えるという構成になっている。

「賢木」巻を構成するこれらの挿話は、右に掲げたような順に執筆されたとは思われない。本稿ではこれらの執筆の順序について考察し、作者の物語創作のありようの一端を明らかにしたいと思う。

## 二

まず、①②③の六条御息所の伊勢下向をめぐる記事について考えてみたい。

この冒頭部の叙述はこのあとの巻の展開とは関るところがなく、前の「葵」巻において源氏の愛人として対比的に描かれた葵上と六条御息所の両者のうち、語り残された御息所との関係を収束する意図において描かれたものと考えられる。

この部分、①御息所が下向を決意する記事②野の宮で源氏の訪問をうける記事③斎宮とともに伊勢に下向する記事のうち、②の野の宮での源氏と御息所の別れの記述は、①や③の記述と相容れない内容をもつ。①の記事の中で二人の関係について記された箇所を掲げる。

「うき世をゆき離れなん」と思ふに、大将の君、さすがに「『今は』と、かけ離れ給ひなん」も口惜しく思されて、御消息ばかりは、あはれなるさまにて、たび／＼通ふ。対面し給はん事をば、「今更にあるまじき事」と、女君も思す。(三六七ページ)<sup>1)</sup>

対面を「あるまじき事」に「女君も思す」とあるのは、当然源氏もそう思っていた事を示す。源氏は、その生霊により葵上をとり殺した御息所に既に

好意をもつことはできず、二人の交際を消息の通わりに限っており、御息所もそのような源氏の心中に思い致し、彼に逢うまいと思っている。そうした二人の心掟てにも拘らず、ひきつづく②野の宮の段では、「つらき物に」思ひはて給ひなんも、いとほしく、人ぎ、情なくや」(三六六ページ)と、従来の御息所への態度を一転させた源氏によって濃密な情愛の中で別れが全うされるのである。別れに臨んで源氏は純な熱い思いをもって御息所の伊勢への赴きを慰留し、御息所も別れの感慨の極まりの中で涙をかくしきれずにいる。①の記述との間には大きな落差が認められる。

また、この別れのあと、斎宮の桂川での祓え以下の儀式の件りで、源氏は野の宮でみせた高揚した愛措の情を転じて斎宮に歌を送り、「宮の御返(り)の、おとな／＼しきを、ほゝゑみて、見居給へり。御年の程よりは、をかしうも、おはすべきかな」と、ただならず。(三七三ページ)と恋心を燃やしているが、源氏におけるこの局面も②と相容れないものがある。更に御所から出発の折、

暗う出で給ひて、二条より、洞院の大路を折れ給ふほど、二条の前なれば、源氏(の)君、いとあはれに思されて、袖にさして、

振りすて、今日は行(く)とも鈴鹿川八十瀬の波に袖はぬれじやと聞え給へれど、(三七四―三七五ページ)

とあり、ここで源氏は袖を歌に添えて贈っている。これは野の宮の段で「袖を、いさ、か折りて、も給へりけるを、さしいれて、」(三七〇ページ)とあることと趣向が重複する。二度も同様な趣向で歌を送るのは「みやび」な行為としては見劣りがし、陳腐な感じになる。これら①と②、②と③の記述の不整合な点を勘案して、作者の執筆の意識が一貫したものと認められないことから、②野の宮の段が前後の件りと執筆の時期が異なるものと考えられるのである。

なお、野の宮での別れは九月七日ほどのことである。このあとの九月十六

日の伊勢への発向と照らして日付に矛盾はなく、その点野の宮の段が挿入によるものである形跡はみえないが、案ずるに、御息所・斎宮の伊勢下向が九月であったのは、『河海抄』に「斎宮群行九月十六日御祭事也」とあり、また歴代斎王が九月に群行（伊勢下向）するのは恒例のことになっていて<sup>3</sup>ことによるもので、『源氏物語』のこの箇所でも群行の日が先に決められていたことが十分考えられる。この既定の群向の日時に従ってまず斎宮の桂川での被え以下の出京の記事が書かれたものと思われる。こうして一通りのアウトラインとして①③の記事が書かれた後、それだけではしかし御息所の深い心の傷が癒されないままであるので、野の宮での情趣あふれる別れが描かれ挿入されることになったのであろう。野の宮の段で「葵」巻以来源氏が御息所をおどましく思う心情が消えている点、源氏を操作する作者の意識として御息所への心のこだわりが解消した頃の挿入かと思われる。

この六条御息所との訣別にひきつづいて、転じて桐壺院の崩御以下の出来事が描かれる。崩御は十一月朔日、四十九日の開けは十二月二十日頃、そして年のあけの除目によって源氏以下の凋落が示されている、というように無駄のない緊密な構成になっていて、この巻の基本的な骨組みが一まとまりになって書かれていたことが考えられる。

### 三

次に源氏二十四歳の正月と歳暮の間に置かれた挿話について考えてみたい。その挿話としては、

⑥ 朧月夜との弘徽殿での忍び逢い

⑦ 藤壺への侵入

⑧ 雲林院詣で

⑨ 朱雀帝・藤壺との対面

がある。これらのうち、朧月夜と藤壺の各々との逢瀬（⑥と⑦）は、源氏が

それぞれの女性へ忍び入るという点で対比的な配置になっている。これらは朧月夜への場合が「例の、夢のやうに、きこえ給ふ。」（三八一ページ）とあり、藤壺への侵入の場合は「夢のやうにぞ有（り）ける。」（三八三ページ）と書かれて、同様な趣向で並行している。そして⑧源氏の雲林院詣では、⑦藤壺への侵入の事件を前提にしており、この記事を踏まえることによって成立している。そしてこのあとに⑨朱雀帝・藤壺との対面が引き続いている点、⑦から⑧、更に⑨と書かれたとみなすことができる。

⑦の藤壺との逢瀬がその前の⑥朧月夜との逢瀬と同様、季節が記されていないことも注目される。これらのうち⑥朧月夜との逢瀬は、年始の情勢を述べる一環として朱雀帝が話題にされ、そこから横滑りするように彼女との逢瀬も描かれたものである。よってこれは正月に近い時のものとして読むことができる。物語の基本構想を支える正月の記述に引き続き、また後の源氏の退去の遠因をつくるという意義をもつことからこの記事は当初の構想の中にあつたのではないか。

それに対して⑦は全く季節を考慮せずに書かれている。⑧、⑨をあわせてこれらの記事は、完結した話としてより独立性の高い挿話といえる。つまり、藤壺の出家の折にこの源氏侵入の事件は意識されておらず、この記述がなくとも物語の展開上唐突な感じは少ない。⑤、⑥、⑪、⑫と続く記事と別個の路線で描かれたものと思われる。思うに⑦は既に書かれた朧月夜との情緒（「夢のやうに」）を藤壺との間であらためて味わおうとしたものか。そして⑦から⑧⑨が引き続き描かれたと思われる。

また雲林院から帰った源氏と語る朱雀帝の思いは、  
 かの君の御事ども、猶、絶えぬさまにきこしめし、気色御覧する折もあれど、「何かは、今始めた事ならばこそあらめ、有（り）そめにける事なれば、さも心かはさむに、似げなかるまじき、人のあはひなりかし」とぞ、思しなして、とがめさせ給はざりける。（三九五ページ）

とある。愛する女性を源氏に横取りされた心境にしては寛容にすぎる。物語の状況から自由になって源氏の立場に偏り必要以上に好意的に描かれている。この部分で、

又、すき／＼しき歌がたりなども、かたみに聞えかはさせ給ふついでに、かの斎宮の、下（り）給ひし日の事、かたちの、をかしおはせしなど、語らせ給ふに、われもうち解けて、野（の）宮の、あはれなりしあけぼの、みな聞こえて給ひてけり。（三九五―三九六ページ）

と野の宮の別れのこと話題にされており、野の宮の段が後に補われたものとする<sup>⑦</sup>と当然こも後の補いとなる。こうしたことから⑦⑧⑨は一連のものとして後に書き加えられたものと考えたい。

藤壺への侵入の記事以下の叙述が後に補われたものであるとすれば、物語当初の基本構想は、藤壺は桐壺院の崩御をきっかけに一年を経て出家し、そこで政治的意味を失うという形であったことが想定される。この一年は藤壺にとって純粹に桐壺院の喪に服す期間であったことになる。妻や夫などの死を契機に出家する場合、一定の期間を置いておこなうという考えが作者にあった<sup>⑧</sup>と思われるが、藤壺におけるそうした純粹な、それ故周到な出家が当初は描かれようとしていたのではないか。それが源氏の三条邸侵入の事件をはさみ入れることでその出家は意味を変え、彼の周囲をはばからぬ愛の行動により深刻な懊悩に陥った彼女において、春宮の将来を見越した上での源氏の恋情の消去というあらたな積極的行為となったのである。この出家が現世的積極性をもつことにより、周到な準備による心深い道心の人であったはずの藤壺は、なお源氏への視線をもって物語に生かされる。つまり「須磨」「明石」巻での沈倫の後、「澤標」「絵合」巻で源氏政権の擁護者としてのあらたな役割を背負わされていくことになる。

## 四

巻の末尾には⑬長雨の頃の韻塞ぎ及び⑭朧月夜との逢瀬の記事がある。これらについて言及したい。

およそ、源氏の須磨退去の理由については、源氏が「須磨」巻で数次にわたってその政治的潔白を主張し流謫を不当とすることや、離京を前に「逢瀬なき涙の川にしづみしや流る、みをのはじめなりけん」（二三ページ）という歌を朧月夜に送り、二人の出会いをこの時点の不幸の起因としていることなどから、朧月夜との関りが遠因となって弘徽殿女御方から悪意を持たれ、東宮冷泉の世を庶幾し今上朱雀帝の御代をないがしろにするようにふるまうという噂の中で、いわば政府転覆の首謀者の嫌疑をかけられて、遠流の定めが決まる前に自主的に退去したと考えるのが一般的<sup>⑨</sup>になっている。朧月夜との関りとは「賢木」巻の密会の発覚をさすが、前掲の構成にみるように二人の逢瀬は「賢木」巻には二回描かれる。最初の密会はこの巻の⑥の弘徽殿でのこと。第二のそれは「賢木」巻末、⑭朧月夜が「わらは病み」で里下がりをして折、源氏が朧月夜の寝所へ侵入する記事にあたる。この折右大臣にその密会の現場を直接に見露わされている。その点この⑭は迫真的で強烈な印象を与える場面であり、源氏の須磨退去を直接導くという感をおこさせているが、この叙述には不自然なところ<sup>⑩</sup>がみられる。

つまり、前年の初冬の朧月夜との文通（⑩）で、

かやうに、おどろかし聞ゆるたぐひ、多かれど、情なからずうちかえりごち給ひて、御心には、深く、染まざるべし。（三九九ページ）

とあって、源氏は朧月夜を含めて女性達に心を深く向けようとしていない。しかるにこの巻末の朧月夜のいる右大臣邸への侵入では、「かゝる事しも、まさる御くせ」（四〇九ページ）と定位された源氏が、朧月夜が里下がりをしたことで彼女のもとに「夜な／＼、対面し給ふ。」（四〇九ページ）とあって、その姿勢には相容れないところがある。この両時点の間には半年という隔たりがあつて彼の心の変化が考えられないこともないが、従前の姿勢を変

更するに關して何のこだわりもなく、唐突にすぎる。また⑩は、⑨の記事で頭の弁に「白虹、日を貫けり。太子、懼ちたり」(三九七ページ)と誦じられ今上朱雀帝への異心の疑いをほのめかされる場面を踏まえている点、後の加筆部分にあたると考えられるが、これの⑭との不整合はそれだけの理由では説明できないものである。右の不整合は、本来二人の密会の噂を広める位置にあるはずの朧月夜付の女房が「気色見る人々もあるべかれど、わづらはしうて、宮には「さ」とは啓せず」(四〇九ページ)と二人の密会の秘密を守ることを含めて、あえて叙述の自然な論理をおかして無理に逢瀬の場面を作っているという感を与えている。

更に、右大臣が御簾に入ろうとする際の性急な言動について、源氏はそれを左大臣と比べ、「たとしへなくほえまる」とあり、「げに入りはててものたまへかしな」と心に思うのであるが、そうした源氏の余裕はこの切迫した場面の当事者の心理としてはそぐわないものといつてよい。

およそこの記事は、⑥の弘徽殿での朧月夜との密会の記事と、源氏の侵入が露頭することなど、重なるところが多い。その初回の逢瀬で承香殿の兄の頭中將によって露頭され、密会のこと噂として広まり右大臣方に不快感を与え、加えて⑫で

春秋の御読経をば、さるものにて、臨時にも、さまざま尊きことどもを、せさせ給ひなどして、又、いたづらに、暇有(り)げなる博士どもを、召し集めて、文作り、韻塞ぎなどやうのすさびわざどもをも、しなど、心をやりて、宮仕えをも、をさ／＼し給はず、御心に任せて、うち遊びておはするを、世(の)中には、頼はしき事ども、やう／＼言ひ出づる人々あるべし」(四〇六―四〇七ページ)

とあるように、「文作り、韻塞ぎ」などを開催して政務を怠り、それが現政権への反感ととられて彼の危機は一触即発の状態になっていたわけである。こうした事情を押さえた時、源氏の須磨退去を導くものとしてはこの初回の逢

瀬のみで十分といえる。巻末⑭の朧月夜との逢瀬は最初の逢瀬の緊迫感を増幅し更に須磨退去と繋げようとしたものと考えられるが、その増幅が大き過ぎて右にみるように違和感を生じたのである。むしろこの「賢木」巻の流れは、巻末の朧月夜との逢瀬がなくなることですっきりする。ここで前掲須磨での源氏の「あふせなき」の歌は、朧月夜とのことが源氏の流されの遠因でこそあれ、直接的原因とはしていないことも確認しておきたい。これらの点からこの巻末の逢瀬の叙述は、はじめは目論まれていなかったと思われる。

それならなぜこの逢瀬の記述が求められたのであろうか。思うに、この件りの直前⑬で二条院での韻塞ぎ及び三位中將の負け業の催しが記されているが、これらの催しはその直前⑫、年始の源氏の不遇を語る中で前述の「御心に任せて、うち遊びておはする」とあることから導かれて、そこでの源氏の不遇の記述からいつとき離れその文雅の興を膨らませようとして描かれたものであつたらう。しかしその韻塞ぎ及び三位中將の負け業の記述は源氏のこの時期の境遇に照らして異常に明るい。この記述をもって終わつてはこの巻末が本来の源氏のありようとそぐわない印象で終わることになる。そこであらたに朧月夜との逢瀬を描き、再び源氏の転落の必然性を強調して、須磨退去に繋げようとしたのではないか。

なお韻塞ぎ記述の中にはその直前⑫の年始の記述との食い違いがみえる。つまり、その⑫の記述では左大臣側の人々が司召に洩れ、

御子どもは、いづれともなく、世にも用ゐられて、心地よげにものし給ひしを、こよなうしづまりて、三位中將なども、世を思ひしづめるさま、こよなし。かの四(の)君をも、なほ、かれ／＼にうち通ひつゝ、めざましう、もてはなれたれば、心解けたる御婿の中にもいれ給はず、「思ひ知れ」とにや、このたびの司召にも漏れぬれど、いとしも、思ひ入れず。(四〇六ページ)

と、右大臣に追従せず四君を妻として重んじない三位中將は右大臣側から好

遇されていない。しかるに韻塞ぎの折には、

中将の御子の、今年はじめて殿上する、八、九ばかりにて、声いとおもしろく、笙の笛吹きなどするを、うつくしび、もて遊び給ふ。四の君腹の二郎なりけり。世の人の思へるよせ重くて、思え殊にかしづけり。

(四〇七―四〇八ページ)

と、本来重んじられないはずの四君腹の二郎がこの席にあつて可愛がられていて、祖父にあたる右大臣の後ろ盾により世の人にかしづかれ、三位中将の立場も安定しているような印象に書かれている。こうした韻語はその記述に時間的な隔たりがあつて、作者の意識が一貫していないところで書かれたものと考えるのが自然である。この記述は、それに続く朧月夜との逢瀬の記述の不可解な点も勘案して、この件りとともに文雅の催しの興に浸ることを目的として、後に補われたものであろう。

なお、韻塞ぎの前の⑫年始の記述と「須磨」巻冒頭の記事はその繋がりが自然に辿られる。つまり、前掲「春秋の御読経をば、さるものにて」の文章は「須磨」巻冒頭の文章「世の中、いとわづらはしく、はしたなきことのみまされば、「せめて、しらず顔に、ありへても、これよりまさることもや」とおぼしなりぬ」(一一ページ)と無理なく繋がる。「須磨」巻冒頭の記事は⑫の記述をうけて書かれたものと考えられる。こうして一通りの筋書により源氏の須磨への流離を書き終えて、そのあとこれら⑬⑭の挿話を書き加えたものであろう。

この⑬⑭の二つの挿話は、⑬韻塞ぎ・三位中将の負け業が長雨の頃で、⑭朧月夜との逢瀬も夏の雨が降っているというように、時間的に近接している。そして更にこの巻のあとの「花散里」巻が五月二十日ごろとあり、これら三つの時点が時間的に異常に過密になっている。およそ源氏が風流韻事をおこなった時期については、前掲「春秋の御読経をば、さるものにて云々」という記述のあとにあり、そこでは「春秋」と季節が確定しない形で書かれ

ている。そのあいまいな季節の記述をうけたこともあり、韻塞ぎという風流な催しは心に余裕のある「つれづれ」の頃、長雨の時期がふさわしいものとされ、一方では「花散里」巻の記述に対応し、その時(五月二〇日ごろ)以前のことしなければならぬこともあつて、長雨の頃にエピソードを密集させることになったのであろう。<sup>11)</sup>

## 五

「賢木」巻を構成する諸挿話のうち、②野の宮の別れ、⑦藤壺への侵入、⑧雲林院詣で、⑨朱雀帝・藤壺との対面、⑩初冬の朧月夜との消息のとり交わし、⑬韻塞ぎ、⑭巻末朧月夜との密会が、一通りの筋の成立のあと補い加えられたことを明らかにしてきた。

これらの箇所の加筆はいつおこなわれたものであろうか。まず巻末の⑬韻塞ぎ、⑭右大臣邸の朧月夜との密会の挿話は長雨の頃に集まり、「花散里」巻の五月二十日頃という日付を意識において書いているので「花散里」巻以後の書き添えであると考えられる。また雲林院の記述がある「松風」巻以前であることも明らかであろう。

更に限定を加える場合、書き添えのなされる以前、この巻の当初の構想による叙述部分(以下、これを初期構想部分とよぶ)は前述のように「須磨」巻冒頭と繋がり、「須磨」巻にもこうした加筆箇所があること、また「明石」巻はその挿話に叙述の韻語は認められず補い入れと思われるところはないということがその鍵になるだろう。つまり一通りのアウトラインをもって叙述がなされ後に加筆がおこなわれるのは「須磨」巻までのことである。こうした点から、作者は一応「須磨」巻の流離を経て、源氏の都での栄達が始まるうとする時(「明石」巻もしくは「濡標」巻のあたり)まで物語を書いたあと、叙述に不足を感じて、さかのぼって書き加えたものと解することができる。

それならこうした挿話は、初期構想部分に対してどのような意図をもって加筆がなされたものか。

まずこれらの挿話の叙述は初期構想部分の内容を踏まえその描写が不完全と思われるところを補い、内容を整えているということがあげられる。例えば野の宮の別れの段で、

心に任せて、みたてまつりつべく、人もしたひぎまに、おぼしたりつる年月は、のどかなりつる御心おごりに、さしもおぼされざりき。また、心の中に、いかにぞや、きずありて、思ひ聞え給ひし後、はた、あはれも、さめつゝ、かく、御中も、隔たりぬるを、珍しき御対面の、昔思えたるに、「あはれ」と、おぼし乱るゝ事、限りなし。(三七〇―三七一ページ)

と源氏と御息所の従来関係を概略している。また、源氏が右大臣邸に忍び入ってそれが露顯した折の右大臣のことばとして、

昔も、こゝろゆるされて、ありそめにけることなれど、人がらに、よろづの罪を許して、「さても見む」と、いひ侍りし折は、心もとめず、めざましげに、もてなされにしかば、安からず思ひ給へしかど、「さるべきにこそは」とて、世に、けがれたりとも、おぼし捨つまじきを頼みにて、かく本意の如くたてまつりながら、なほ、その憚りありて、うけばりたる女御なども、いはせ侍らぬをだに、あかず口惜しく思ひ給ふるに、(以下略)(四二二ページ)

とあって、臘月夜に対する源氏の扱いを右大臣の側からまとめてその仕打ちを嘆いている。こうして初期構想部分で描き足りないところをその記述の線に沿って膨らましていることが認められる。そのような書き添えのほか、前述の②野の宮の別れや⑦藤壺への侵入など、初期構想部分の各々の場面が潜在的にもっともしくはその場面が連想させる興味を集中的に膨らませることがある。それらは一方で源氏の政治の場における危機的状況から解放されて、

余裕をもった筆致になっているといえる。これは既に「明石」巻あたりまで一応の筋書きを書き終えていて、須磨・明石の流離の克服という源氏の運命を見通した上での余裕であろう。その余裕は⑧雲林院詣でや⑬の漢詩的世界の興味を物語に取り入れて源氏の文雅の側面を際立たせているという場面に現れている。⑬韻塞ぎの負け業の折に源氏は「文王の子、成王の弟」と誦し、更に「成王の何」とことばに出そうとする(四〇九ページ)。それは春宮の御代を思慮に入れていることで、ともすれば現政權をないがしろにする企てをもつともみなされかねないはずである。初期構想部分ではこうした考えはその胸中にもあつてはならないことであつた。ここでそれを詩の興に促されて心に思ふことは、そうした政治的窮状を考慮しなくなつており、その窮状から解放された時点の書き加えであつたことを示している。

更に紫上と源氏の関りにも変質がある。初期構想部分は

西の村の姫君の御さいはひを、世(の)人も、愛で聞ゆ。少納言なども、人しれず、「故尼上の御祈りのしるし」と見たてまつる。父親王も、思ふさまに、きこえかはし給ふ。嫡腹の、「かぎりなく」とおぼすは、はかしくしうもえあらぬに、ねたげなる事多くて、まゝ、母の北の方は、安からずおぼすべし。物語にことさらに、作り出でたるやうなる御有様なり。(三八〇―三八一ページ)

と源氏にすくいとられ好遇を得ていることに幸いを見出しているにとどまらず、一方後に書き加えられた挿話の中では源氏の愛情が紫上に定まりつつあり、藤壺への愛情さえも紫上に向けられようとしている。例えば、⑦藤壺への侵入の折、彼女が紫上と似ていることで源氏は「すこし、物思ひのはるけどころある心地」(三八五ページ)を感じている。幼い日から心を占め続けた憧れの女性のところへの懸命な侵入という切迫した場面で他の女性に思ひを及ぼしその女性に傾く心をみせるというのは、恋する若者の心として理解の外のことといえる。また頑なに源氏を拒む藤壺をひとり思う「つれづれ」

からの解放の故に赴いた雲林院で彼は出家への願望をもつが、その彼にとつてまずほだしとなるが紫上の存在であったという。情熱の燃焼において危険を冒して達った当の藤壺は彼の心を現世へ向けさせるものとしては占めていないのである。こうした点を含めて源氏の愛の対象が藤壺から紫上に向けられようとし、他の女君達への彼の好みも紫上への情愛として収斂しているといえる。それは「須磨」「卷以降の物語の方向の先取りとして捉えられよう。」「須磨」「明石」巻以降の物語の傾向において物語を一つの方向へ押し進めようとする姿勢がみえるのである。その点やはり「須磨」「明石」巻以降の書き加えと考えるべきであろう。

一方その書き加えにおいて初期構想部分に各々の興に従った新しい創作の意図を重ねるとき、従来の物語の秩序を乱すことにもなっている。つまり源氏の人間像はこの加筆によって拡散がみられる。例えば彼は③に②の叙述を重ねることで純愛の人(②)と色好み(③)という性格を併せもつことになる。またそれらの場面での物語の趣向・雰囲気の違いも看過できない。しかしそうした異質な要因を取り込みながら物語の主人公としてその存立が揺るがないのは、源氏が超越的理想性において許容されてうけとられ、そうした異質性の同居が彼の絶対性を逆に保証することになっている故であろう。<sup>(13)</sup>

## 六

以上、本稿では「賢木」巻の構成を考察する中で、物語が一つの基本構想をもって「須磨」「明石」巻あたりまで書かれ、その後各々の場面の興を膨らますなどの意図において書き添えがおこなわれたことを明らかにした。こうした加筆のあと、更に帰京後の源氏の栄華の過程が辿られていくことになる。

武田宗俊氏による玉鬘系十六帖の後記説は、物語第一部のタテ割の二系列という把握、各系列の意味づけ、玉鬘系の一括挿入という点などに修正が求

められたが、<sup>(15)</sup> 各々の巻がその前後の巻と緊密な関係をもちつつ後記挿入されたものと考えるとき、その妥当性が認められるところであろう。本稿で指摘した「賢木」巻の加筆箇所存在は、玉鬘系の各巻の挿入に先立ち紫上系の創作において、より小さな規模でその挿入の形がみられ、これらの巻で認められる小さな齟齬が源氏の絶対性に吸収されつつも、紫上系の成立のあと玉鬘系において肥大化していくことの必然性を明示するものといえる。玉鬘系の巻々は各々紫上系の巻を踏まえてあらたな世界を作り出しているが、その固有の世界は既定の物語の枠から自由になろうとする力を膨らませている。その枠の中で保証された自律性が物語の新しい秩序を作り出し、<sup>(16)</sup> 源氏の栄華を崩しつつその絶対性を変質させていくのである。

およそ一つの巻の中で執筆の時期の異なる挿話がある場合、各々の挿話を吟味しその執筆時期を確定した上で作者の創作意図とその構想の変容なりを捉えその巻の位置づけをする必要があり、その点構想を辿る際的方法的配慮があらたにもとめられるところである。本稿は「賢木」巻においてそれを試みたものである。こうした観点を他の紫上系の巻々に及ぼしていくとき、原構想において書き起こされたこの物語が、長編の基本構想をもって展開しそれが更に膨らみつつ物語世界の奥行きを保証していく経緯が明らかにされるものと思われる。

(1) 『源氏物語』本文の引用は、山岸徳平氏校注『源氏物語』(日本古典文学大系、岩波書店)による。

(2) 国文注釈全書本文による。なお玉上琢弥氏編『紫明抄河海抄』(昭四三・六、角川書店)所収の『河海抄』には「齋宮群行九月十六日御定(祭イ)前事也」とある。

(3) ちなみに『源氏物語』の成立以前、半世紀の間に伊勢へ詳行した歴



代斎王とその群行の年月日(一)内)は、以下のとおりである。

悦子内親王(天曆三・九・二三)

樂子内親王(天徳元・九・五)

隆子内親王(天禄二・九・二三)

規子内親王(貞元二・九・一六)

濟子内親王(永延二・九・二〇)

右のうち、規子内親王の群行は、九月十六日であり、また母の徽子内親王が同内親王につきそって伊勢へ赴いていることが、『河海抄』に「円融院御時斎宮くたり侍けるに母の斎宮のもろともに鈴鹿山こゆとて 拾遺世にふれは又もこえけり鈴鹿山むかしのいまになるにや有らん徽子女王斎宮女御」とあることから知られ、この「賢木」巻の六条御息所の状況と重なるところがある。

(4) ⑩は後述のように後の加筆と考える。

(5) 「か、る悲しさの紛れに、昔よりの本意も遂げまほしく」思せど、こ、ろ弱きのちの謗りをおぼせば、「この程を過ぐさん」とし給ふに「御法」巻一八六―一八七ページ)など。

(6) (1)源氏が左大臣に暇乞いに訪れた際、左大臣の前に「にこりなき心に任せて、つれなく過ぐし侍らんもいと、はかりおほく」(一四ページ)といったこと。(2)藤壺を前に「かく、思ひかけぬ罪にあたり侍るも」(二四ページ)といったこと。(3)桐壺院の墓前での「うき世をば今ぞわかる、とむらむ名をばたずすの神にまかせて」(二六ページ)という歌。(4)須磨へ訪れた宰相(三位)中將を前にして詠んだ歌に「我は春日のくもり無き身ぞ」(五一ページ)とあったこと。(5)卷末三月上巳の禊ぎの折、「八百よろづ神もあはれと思ふらんをかせる罪のそれとなければ」(五二ページ)と詠んだことなど。

それらのうち、(3)、(5)は、左大臣・宰相中将など他の人々への表だ

った表明を必要としない本音のことばとしてよい。

(7) 寺本直彦氏「須磨のわび住まい」(『講座源氏物語の世界』第三集、昭五六・三、有斐閣)など。

(8) この印象により、「源氏と朧月夜内侍との中は内侍の父に見露はさる。その罪免れがたくて、源氏の近流となり」(藤岡作太郎氏『国文学全史平安朝篇』)などの見解が導かれたものであろう。

(9) 「若菜」上巻の女三宮降嫁の後、源氏の三日の通いの折、紫上が心内の苦しい思いを隠蔽しつつ女房達を前に宮との交誼を求め、表面では葛藤も見せないということがある。そこには彼女付の女房達の好奇心な目に彼女が腐心しているという事情が読みとれる。ここでの局面はそれと対照的な女房達の描かれ方である。

(10) 源氏が右大臣のふるまいに「げに入りはてものたまへかしな」と余裕をもって評するのは、その忍び逢いの露頭の危機的意味が薄らいでおり、彼の運命(流謫と召還)が一応見通された時点で書かれたことと余裕に由来するものではないか。

(11) この点、「花散里」巻も基本的に「賢木」巻の①③⑤⑥⑪⑫の構想の系列に入るものと考ええる。

(12) 拙稿『源氏物語「須磨」巻制作過程略解』(『文芸研究』第一二二集、平成元・九)。

(13) 今井源衛氏「光源氏」(『日本文学』昭三二・九)などに指摘される源氏の性格の複雑・多様なありようは、こうした制作の事情に因があるのではないか。

(14) 武田宗俊氏「源氏物語の最初の形態」(『文学』昭二五・六―七)。

(15) 大朝雄二氏「源氏物語の正篇の研究」(『序章』(昭五〇・一〇・桜楓社)、伊藤傳氏「玉鬘 六条院物語の成立」(『源氏物語の人物と構造』昭五七・五、桜楓社)など。

(16) この点については、拙稿「蓬生」巻草子地試解」(『日本文学』昭五九・三)、「光源氏論—玉鬘十帖を中心として—」(『文化』第四四巻第三・四号、昭五六・二)において述べたことがある。参照して頂ければ幸いである。

(17) (12)の拙稿において指摘した須磨での流離の悲しみを主題とする源氏の詠などこれにあたる。うら若い紫の上の発見・藤壺との許されぬ恋などを含めてのこうした完結性をもつ挿話を核に長編性をもつ基本構想が営まれたものと思われる。なお「賢木」巻ではそうした原構想にあたる部分は認められない。